



## 平成15年度 北海道医師会賞受賞者決定！ 受賞者業績紹介

会員の医学的研究を奨励するため、医学的研究および医事衛生に関する優秀な業績の中から贈呈している北海道医師会賞の今年度受賞者が決定いたしました。

これは今春以来郡市医師会長並びに医育機関医師会長に候補者の推薦方を依頼し、推薦のあったものについて、道内三大学の医学研究科長、学長、附属病院長、医師会長並びに道保健福祉部長と当会副会長を委員とする北海道医師会賞受賞者選定委員会〔8月8日(金)〕において慎重審議の結果、8名の業績はいずれも優秀であり、今年度の

北海道医師会賞とすべきものと答申され、さらに当会理事会の議を経て決定されたものです。

ここに受賞された方々の業績概要をご紹介しますとともに、受賞者各位の今後一層のご活躍を祈念いたします。

なお、贈呈式は、9月26日(金)午後5時から札幌グランドホテルにおいて開催される第83回北海道医学大会総会(第1日)の席上で行われることになっています。

—学術部—

### 1. 北海道医師会賞

医師会名	受賞者職氏名	研究(業績)題名
札幌市	医社団碩心会心臓血管センター 北海道大野病院 院長 すぎ 杉 木 けん じ 司	心臓刺激伝導系機能に対する臨床電気生理検査法の確立と臨床への導入に関する研究
	医恵佑会札幌病院 院長・理事長 ほそ かわ まさ お 夫 細 川 正 夫	食道癌の診断と治療について
北海道大学	北大医学研究科 形成外科学分野 教授 すぎ 杉 はら つね き 樹 原 平 樹	形成・再建外科における遊離複合組織移植に関する研究
	北大医学研究科 リハビリテーション医学分野 教授 ま の ゆき お 生 真 野 行 生	経頭蓋磁気刺激法の研究
札幌医科大学	札幌医大医学部 眼科学講座 教授 おお つか けん じ 二 大 塚 賢 二	眼球運動の制御機構の解明とその臨床応用
	札幌医大医学部 病理学第一講座 教授 さ とう のり ゆき 志 佐 藤 昇 志	ヒト癌の免疫応答に関する研究
旭川医科大学	旭川医大医学部 健康科学講座 教授 よし だ たか ひこ 吉 田 貴 彦	砒素の生体影響についての多面的解析と生体影響指標の確立
	旭川医大医学部 内科学第三講座 助教授 さい とう ゆう すけ 齊 藤 裕 輔	表面型大腸腫瘍の診断・治療と国際的意義

## 1. 北海道医師会賞・北海道知事賞

心臓刺激伝導系機能に対する臨床電気生理検査法の確立と臨床への導入に関する研究



医社団碩心会心臓血管センター北海道大野病院 院長 すぎき けんじ 杉木 健司

杉木健司先生は、昭和43年札幌医科大学を卒業後、座間米軍陸軍病院でインターンとして研修し、昭和44年から札幌医科大学胸部外科に入局と同時に大学院に入学された。昭和54年からは米国ロサンゼルスセントヴィンセント医療センターで心臓クリニカルフェローとして臨床研修を積み、昭和57年に札幌医科大学助手、昭和59年に同講師、昭和62年からは北海道大野病院副院長を務めた後、平成6年からは現在の心臓血管センター

北海道大野病院の院長として活躍されている。

先生は、従来、心電図のみであった不整脈検査法に全国に先駆けて心内心電図（ヒス束心電図）を臨床電気生理検査方法として臨床に導入するなど研究を重ね、現在ではこの検査法はペースメーカー植込み実施施設の施設基準認定条件の一つともなっている。

現在に至るまで、北海道における臨床電気生理検査法研究の第一人者として、不整脈に対する薬剤治療とペースメーカー治療などの発展、推進に指導的立場で活躍されている。

また、多数の著書・論文を執筆され、道内外における学会活動も顕著であり、その活動は高く評価されている。

以上、先生は研究家・臨床家としてさらなる発展が期待される。

食道癌の診断と治療について



医恵佑会札幌病院 院長・理事長 ほそかわ まさお 細川 正夫

細川正夫先生は、昭和43年北海道大学医学部を卒業と同時に北海道大学医学部附属病院に勤務され、昭和44年からは市立旭川病院外科に、昭和46年からは国立がんセンター病院外科のレジデントとして、また、昭和49年からは北海道大学第2外科において消化管、主に食道癌の臨床研究の研鑽を積まれた。その後、昭和56年に悪性腫瘍の診断・治療及び再発・終末期の治療を一貫して行う癌の専門病院として恵佑会札幌病院を設立され

た。また、平成6年に機能をより充実させるために恵佑会東病院を開設、平成12年には癌末期治療の選択肢の一つとして緩和ケア病棟を開設され、癌の集学的治療で地域医療に貢献されている。

また、食道癌の診断と治療を歯科口腔外科、耳鼻咽喉科、消化器内科、消化器外科、放射線科、臨床病理と共に病院全体で取り組んでいる。

先生は、現在に至るまで一貫して食道癌の臨床と研究に携わり、北海道における消化器悪性腫瘍研究の第一人者として活躍される中、多数の著書、論文を執筆されている。

また、学会活動は国内のみならず世界でも多数の発表をされるなど顕著なものがあり、その活動は高く評価されている。

以上、先生は研究家・臨床家としてさらなる発展が期待される。

## 形成・再建外科における遊離複合組織移植に関する研究



北大医学研究科形成外科学分野 教授 <sup>すぎはら</sup>杉原 <sup>つねき</sup>平樹

杉原平樹教授は、昭和42年に北海道大学医学部を卒業、同大学附属病院でインターン後、昭和43年に形成外科を専攻するため、皮膚科学講座内の「形成外科診療班」に所属した。

昭和49～50年にはニュージーランド・国立ミドルモア病院にて形成外科臨床医として頭蓋顔面外科を研修、その後、北大形成外科の診療科ならびに医学部講座の創設にも直接参画した。また平成4年には、米国アラバマ大学・プロビデンスメディカルセンターにて組織移植・再建外科学を研鑽し、平成7年から北海道大学医学部形成外科学講

座の教授を担当している。診療面では、悪性黒色腫の集学的治療法の開発、先天性形態異常をふくむ頭蓋顔面外科領域疾患に対する医科・歯科の関連領域による独自の「北大方式チーム医療」の展開・確立等により、当該患者のQOLの向上に多大な貢献を行った。また、研究領域は広く形成外科学全般にわたるが、主に再建外科ならびに遊離組織移植に関する基礎的研究とその臨床応用研究を展開し、その成果は多くの国際誌に掲載され、高い評価を得ている。

日本形成外科学会常任理事・会長、日本頭蓋顔面外科学会会長等を歴任し、現日韓形成外科学会会長として、国内外における形成外科学の指導的な立場にある。

現在、北海道大学医学部附属病院長ならびに北海道大学医師会長として、卒前・卒後の教育研修ならびに地域医療をとおして、北海道における医療の向上・発展に寄与している。

## 経頭蓋磁気刺激法の研究



北大医学研究科リハビリテーション医学分野 教授 <sup>まの</sup>眞野 <sup>ゆきお</sup>行生

眞野行生教授は、リハビリテーション医学に造詣が深く、大学卒業後日本でのリハビリテーション医学が未開発の時代にリハビリテーションの研修でアメリカに渡り、residentを修了し、アメリカの専門医にも合格している。神経系のリハビリテーション医学の研究では世界のリーダーの一人である。とくに運動訓練による神経系の可塑性の研究は高く評価されている。経頭蓋磁気刺激法の研究会の事務局を担当し、本法の臨床的評価、さらに最近ではそれを治療に応用し、その研究の日本の責任者として活躍している。

経頭蓋磁気刺激法の開発では、日本ではじめて

経頭蓋磁気刺激法を疾患の評価に用いた。それ以後そのコイル開発、経頭蓋磁気刺激法の頭部に及ぼす影響を動物実験で測定し、安全域を定め、また磁気工学の知識を応用して磁気の頭蓋内での分布を測定した。また各種神経疾患での本法の評価方法の有用性を発表した。さらに最近では経頭蓋磁気刺激法をヒトの脳に連続して与えると、機能に変化を引き起こす可能性を、動物での神経薬理学的方法で発表している。これらはうつ病の治療、パーキンソン病の治療、小脳性運動失調症状などの治療に応用されてきている。また、米国のNIHで開催された連続経頭蓋磁気刺激法の安全性の検討会には日本の代表として、その基準づくりに参画している。

なお神経縫合後の大脳皮質の運動野の変化についての論文は、神経の可塑性を論ずる時の重要な論文となっている。このようにこれらの神経リハビリテーション医学研究への貢献を評価され、第13回国際電気生理運動学会 (ISEK) の国際学会の会長を務めた。

## 眼球運動の制御機構の解明とその臨床応用



札幌医大医学部眼科学講座 教授 おおつか 大塚 けんじ 賢二

眼球運動障害は患者に多大な生活上の困難をもたらすにもかかわらず、これを診断、治療する専門医は、本邦ではごくわずかしかない。米国では神経眼科 (Neuro-Ophthalmology) としてその専門領域が確立されているが、本邦ではこうしたシステムは存在しない。大塚賢二教授は、数少ない Neuro-Ophthalmology の専門医として臨床に携わると同時に眼科医教育に神経眼科学を取り入れ、眼球運動および視覚機能を総合的に理解できる眼科医の育成に努めてきた。

昭和60年以降、臨床研究と平行して眼球運動の

神経生理学および神経解剖学的研究を続けてきた。その中でも小脳における衝動性眼球運動の制御機構および大脳皮質一上丘における焦点調節、輻湊運動の制御機構に関する研究成果は国際的に高い評価を受けており、Sapporo Group として認知されている。最近の成果として上丘吻側領域が、焦点調節および輻湊運動の両方の制御に関与し、両者の機能的運動に寄与していることを発見した。この発見は、これまで全く不明であった近見反応の中枢神経機構を理解する手がかりとなるものと期待されている。最近、上丘吻側領域に限局した病変により焦点調節と輻湊運動の両方が障害されている症例が報告され、大塚教授らの基礎研究の成果が臨床的に応用されるに至った。

眼科臨床医による地道な眼球運動の基礎的研究を通じて、眼球運動障害の病態解明に寄与すると同時に、科学的成果に基づく神経眼科学をわが国に定着、発展させることに貢献するものと期待されている。

## ヒト癌の免疫応答に関する研究



札幌医大医学部病理学第1講座 教授 さとう 佐藤 のりゆき 昇志

多くの疾患が免疫学的制御により治療、予防が可能である様に、癌も患者本人がもつ免疫の力でコントロールできれば、こんなに素晴らしいことはない。長い間、佐藤昇志教授はこの魅力ある課題に取り組んできた。この研究の最も重要な課題は患者に癌の免疫反応をおこす癌抗原を明らかにすることであったが、このようなヒト癌抗原は長い間不明のままであった。

佐藤昇志教授らはヒト癌免疫研究が歴史的に盛んで伝統あるこの北海道の地で、様々な施設との共同研究を基盤に、ヒト癌の免疫治療法の確立をめざし腫瘍抗原の同定に努めてきた。その結果、

今日迄、7種類のヒト抗原を明らかにされ、札幌発の世界に向けてのオリジナルな癌ワクチン開発研究にまで到達された。現在、札幌医大や道内の病院を中心に全国6カ所の施設でこれらの癌抗原の癌ワクチン臨床試験が行われており、成果が大いに期待されているところである。

加えるに佐藤昇志教授は、癌抗原解析の過程で熱ショック蛋白質あるいは分子シャペロンといわれる分子が、免疫学的に大変重要な働きを果たしていることも発見され、この分野でも免疫学をリードされている。

以上のように、佐藤昇志教授は癌と免疫の研究が主体をなすが、病理学教室として疾病の様々な解析も行われており、分子病理学を基盤とした基礎研究でも多くの業績をあげている。

また、大学院医学研究科副科長として大学院生の教育、研究のインフラの整備、システムの構築にも尽力されて本道の医学の進展に寄与されている。

## 砒素の生体影響についての多面的解析と生体影響指標の確立



旭川医大医学部健康科学講座 教授 よしだ 吉田 たかひこ 貴彦

吉田貴彦教授は、砒素による生体影響の発現機序につき多方面から解析し、それらを順次、砒素に曝露するヒト集団に適応してその有用性を検討してきた。

砒素の高度曝露が免疫機能を抑制する一方、比較的低濃度曝露で逆に免疫亢進することを見出した。この現象を微量の砒素に曝露する作業員にて確認し、健康管理に有効な生物学的モニタリング法として応用した。さらに、慢性砒素中毒の典型的症状である皮膚角化症、皮膚癌に注目し、砒素がヒト正常表皮角化細胞に作用しGM-CSF等の

増殖因子を産生誘導させ自身の増殖を亢進させることを見出した。動物実験も合わせ、砒素の表皮角化細胞増殖促進作用が皮膚角化症や皮膚癌の発症に関与することを明らかにした。これらの現象をヒト集団にて実証するため、中国において砒素汚染地下水を飲用する地域で調査した。皮膚角化症や色素沈着および末梢循環障害に量反応関係を明らかとし、症状発現の個体差につき検討を行った。現在、中国でのフィールド調査を継続し、慢性砒素中毒の症状発現に影響する遺伝的素因や環境因子を解析し、発癌を含む慢性中毒発症の予測さらに予防につなげる研究を目指している。

飲料水を介した慢性砒素曝露人口は世界で数千万人に上り、わが国でも労働現場での慢性微量曝露など潜在的砒素曝露人口は少なくない。砒素中毒で発癌が起こることから、砒素曝露の影響を鋭敏にとらえる生体影響指標を確立し中毒発症の予測、予防を図ることは人類の幸福にとって有用である。

## 表面型大腸腫瘍の診断・治療と国際的意義



旭川医大医学部内科学第三講座 助教授 さいとう 齊藤 ゆうすけ 裕輔

大腸癌の組織発生に関しては、欧米では大腸ポリープを母地として大腸癌が発生するというadenoma-carcinoma sequence説が一般に受け入れられている。近年、わが国で平坦または陥凹型の表面型大腸腫瘍が発見されるようになり、これらは通常のポリープに比べて、発見が困難で組織学的異型度の高い病変であることが報告された。齊藤裕輔助教授は早くから表面型大腸腫瘍に注目し、これらは腫瘍径の小さなうちから粘膜下浸潤を来し、生物学的に悪性度が高い病変であるとの

臨床的結果、並びに表面型大腸腫瘍に対する治療法選択に有用なX線、内視鏡、高周波超音波細径プローブ所見について研究・報告を行ってきた。しかし、表面型大腸腫瘍に関する米国、欧州からの報告は僅かで、さらに米国では表面型大腸腫瘍は大腸癌死亡には重要な役割を果たしていないとの報告がなされており、大腸癌の組織発生における表面型大腸腫瘍の役割は世界的には混沌としていた。齊藤裕輔助教授は“米国では表面型大腸腫瘍は頻度、重要性ともに過小評価されている”との仮説をたて、米国内で臨床研究を行った結果、米国においても表面型大腸腫瘍が日本と同頻度で発見され、それら病変の臨床的重要性について報告した。これらの研究により日本で発見された表面型大腸腫瘍の存在および重要性についての世界的認識が高まり、現在、世界で癌死亡の2位となっている大腸癌死亡の減少に寄与することが期待される。

# 第83回 北海道医学大会総会プログラム

平成15年9月26日(金)・27日(土) 札幌市

## 第1日 9月26日(金)

札幌グランドホテル

◆平成15年度北海道医師会賞並びに北海道知事賞贈呈式 (17:00~17:50)

◆イブニング・レクチャー (18:00~19:00)

座長 北海道医師会長 飯塚弘志

テーマ「地球環境問題—いかにして地球を救うか—」

講師 岩手県立大学学長 西澤潤一

◆平成15年度北海道医師会賞並びに北海道知事賞受賞者祝賀会、  
第83回北海道医学大会総会懇親会 (19:00~20:30)

## 第2日 9月27日(土)

北大医学部臨床講義棟大講堂

◆各科トピックス (10:00~12:00)

演題	演者	座長
1. 「生体防御レクチンとしてのコ レクチンファミリー」	旭川医大微生物学 教授 若宮伸隆	札幌医大第一生化学 教授 黒木由夫
2. 「放射線治療の現状と将来」	札幌医大放射線医学 教授 晴山雅人	旭川医大放射線医学 教授 油野民雄
3. 「前頭連合野の管理システム」	北大高次脳機能学 教授 澤口俊之	札幌医大第二生理学 教授 青木藩
4. 「細胞治療による四肢の再生」	札幌北榆病院 理事長 川村明夫	北海道医師会 常任理事 渡辺直樹

----- 休憩 (12:00~13:00) -----

◆特別講演 (13:00~14:00)

座長 第83回北海道医学大会会頭 八竹直

テーマ「EBMとNBMが提唱するもの—患者中心の医療—」

講師 京大医学研究科臨床疫学教授 福井次矢  
EBM共同研究センター長

◆シンポジウム (14:00~16:00)

「睡眠医療の最前線」

司会 北大呼吸器内科学教授 西村正治  
旭川医大精神医学教授 千葉茂

- 「精神科領域」 旭川医大精神医学 田村義之
- 「内科領域」 幌南病院呼吸器科 斉藤拓志
- 「耳鼻咽喉科領域」 札幌医大耳鼻咽喉科 新谷朋子
- 「統合型睡眠センターにおける睡眠医療システム」 久留米大精神医学 内村直尚

◆医療機器・医薬品展示会 (10:00~16:00)

参加申込み・お問い合わせは事業第4課までご連絡ください。

TEL 011-231-1727 FAX 011-210-4514

Email: jigyo4ka@office.hokkaido.med.or.jp